

解題

黒木勘藏

本卷は近松名作集上巻のあとをうけて、正徳元年作者五十九歳の時からその絶筆に至る迄の代表的名作、世話物十一篇時代物十三篇合せて廿四篇を収めた。これによつて大近松の圓熟時代の代表的傑作をすべて知り得ると共に、上巻と併せ見れば、こゝに我邦空前の大劇詩人の全貌を窺知し得る事と思ふ。

作品選擇の標準及び校訂の方針は上巻と變る處はない。以下簡単に本卷所收の廿四篇について解題を加へる。

忠兵衛
梅川 冥途の飛脚

正徳元年三月五日から「新しいろは物語」の切として竹本座上場。時に作者五十九歳。

大阪淡路町の飛脚宿龜屋の養子忠兵衛が新町槌屋の抱へ梅川に馴染んだ揚句金に窮して遂に友達

丹波屋八右衛門の江戸よりの爲替金五十兩迄費ひ込んだ。尤も之は八右衛門にも苦境を告げて一時融通の諒解を得たのであつた。然るに八右衛門は新町の揚屋越後屋で大勢の遊女に取巻かれて忠兵衛の悪口を散々言ひ散らした。之を立聞いた短氣の忠兵衛は赫怒の情抑へ難く、遂に出入の屋敷へ居ける筈の三百兩の爲替金の封印を切つて、養子の時の持參金であると稱へて五十兩を八右衛門にたゞき付け、二階から下りて來て此狂態を止めようとした梅川の身請金を支拂ふ。二人は相携へて廓を出で、奈良の旅籠三輪の茶屋と廿日許り諸方をうろついて遂に親里新口村に入込み、舊知の農夫忠三郎の家に忍び入り、こゝで實父孫右衛門と餘所ながらの對面をする。此場面の孫右衛門の世間への義理と忠兵衛に對する肉親の愛情との葛藤は極めてよく描かれてゐる。忠三郎の情で裏道から御所街道へと落ち延びようとした二人は、程なく代官の手に捕へられて了ふといふ筋。

近松の世話物中最も著名な作の一つであるが、此實説が不明である爲に劇化の程度も判然しないが、比較的實説に近からうといはれる「好色入子枕」(正徳六年刊)の記事を摘んでいへばかうである。忠兵衛は大和の豪農増田忠左衛門の長男で、男女の雙生兒の片破れであつた。美男で世才にたけてゐた。隣家の因州浪人の娘お吉と密かに相契つて居たが、お吉の父はさる醫者に嫁せしめようとしたので、お吉は其縁談を破らうとして父の手文庫なる持參金を盗み取つた所へ父が來たから當座遁れにその金を垣一重隔てた忠兵衛の庭に投げた。お吉は父の背打に恐れ慄いて氣絶したまゝ蘇生しなかつた。忠兵衛は世間から悪評を受けたので、父忠左衛門は表面勘當として窃かに知るべを

便つて龜屋の養子とした。忠兵衛はお吉の事に懲りて身を慎んで居たが、或年その當時流行の凧を揚げ、それが槌屋の屋根に落ちたのが縁で、梅川と馴染み、互に深くなり金に詰つて爲替金を私して梅川を請出し、大和路を指して行く途中追手の爲に召捕られ、十二月五日千口の刑場で忠兵衛は刑せられた。梅川は尼となり伏見の片ほとりに庵を結んで忠兵衛の菩提を弔つたといふ。

凧の取持つ縁などは餘りに奇縁過るが、表面勘當の體で龜屋の養子となつたについては右のやうないきさつもあつたかも知れぬ。併し梅川の末路は小説的に潤色されてゐて事實でないことは寶永七年九月刊行の「御入部伽羅女」の記事が之を裏書するやうに思はれる。即ち梅川は忠兵衛と共に捕へられて入牢したが寶永七年の春には赦されて新町の廓に返り咲きをしたものと見えて、

此廣い大阪にも珍しく、今年の春より梅川といふ新町の女郎籠入してより久しい事ぢやが、不思議なるかな手足爪先のあの美しさ、髪の結びぶり、いつにても爪を隠すは猫の變化へんげに疑ひなし、こなた衆も國へ土産に、女郎の道中といふものを見ておきやれと、爰にても見立てられし處へ、槌屋の梅川、それ來たはとて、人の山高きが故に貴からず、器量をもつて貴人、數萬の中を八の字もどきゆりだし道中（御入部伽羅女、卷三、第十飛脚は月にお三度大盡）

といつて居るし、また同書卷五、第十九義理より深い槌屋の梅川の條に、

かけまくも槌屋の梅川、くもりなき其身の仕合、佛神の御加護にて、世間廣き御恵みに、あひに相生の松よりすぐれしはやり女郎、京へ歸る名残とて、あなたこなたへ暇乞ひ……。

とある。梅川には罪は無いので放免されて新町で二度の勤めに人氣を湧かせ、それより京都へ歸つたらしく、決して忠兵衛に心中を立て抜いたのではなかつた。それ故に正徳元年正月京都都萬太夫座の二の替り「けいせい九品淨土」くほんのじやうどで梅川は山本かもん、之に對して三度飛脚龜屋忠兵衛(花岡文左衛門)は端役で、梅川には他に情夫があつて廓を抜出る手段として色仕掛でこの忠兵衛に連出してもらひ馬方六藏に殺されて金を取られ、梅川は越前の三國で二度の勤めをするといふ仕組になつて居るのも、梅川の性格を原事實に表れる人物に近く脚色した爲であつたらう。こゝに我々は虚實皮膜の藝術觀に立脚して事件を美化し淨化した大詩人の才筆とその人格とを歎美せざるを得ないのである。

劇の場面としては封印切と新口村が最も勝れて居る事は言ふ迄もないが、趣向の上に於ては上の巻段切で堂島屋敷の金を懐にしてうか／＼と米屋町迄歩むのは「重井筒」の四つ辻の段と相似た點があり、新口村の段は後の「博多小女郎波枕」の中の卷心清町の段と一脈相通する親心の切なる表現を描いたものである。次に有名な下巻道行の「翠帳紅閨に、枕並べし閨の内、……」の文句は寶永元年刊行の「松の落葉」第二卷の稻荷塚四つ門から出て居る。今参考として左にその全文を掲げる。

二上り翠帳紅閨に、枕並ぶる床の内、馴れしねまきの夜すがらも、四つ門の跡夢もなし。さるにても我がつまの、秋より先に必ずと仇し言葉の人心、そなたの空よと眺むれど、それぞといひし人もなし、夏もはやすぎ窓の、秋風冷かに吹き落ちて、よしや思へばこれとても、逢ふは別れるべし、世をも人も恨むまじ、たゞ身の程を思ひつゞけて、我ひとりまるねの床こそ淋しけれ。

にない、自分は三年越し契つた在所の新兵衛と夫婦になり度いからと懇願して許される。江戸から歸つた忠兵衛はこれを聞いて、梅川を請出して男の顔を立てるといふ、處が梅川は友達の利右衛門



「笠 度 三」本 正 節 蘭 宮

が身請するといつて既に手附金を渡したと養母から聞き、爲替金を懐中して新町の揚屋へ行き、利右衛門の心底も汲まずに罵詈したり足蹴にしたりするが、利右衛門の眞情を知るに及びその情誼に感じ、梅川を戀敵の田舎者には渡さないと爲替金で身請をすませて三輪の新七の許に身を寄せらる。新七夫婦は叔母の恩を思つて二人をかくまひ、殊に新

七の父新兵衛は身を犠牲にしても二人を助けようとしたが遂に捕へられるのである。筋は通つてゐるが、忠兵衛は非常に冷靜な打算的人物として描かれ、全體に理智的であり、義理づくめであつ

て、原作に見るやうな温かい人情味と詩趣とが無い上に、文章もひどく見劣りがして、兩作者の劇詩人としての優劣を明かに示して居る。



「村口の二」本正節園宮

更に上記の二篇をつき合せて改作したのが安永二年十二月廿三日から豊竹此吉座で上演された「けいせい戀飛脚」で、作者は菅專助・若竹笛躬である。上下二卷より成り、上卷は生玉の段、飛脚屋の段、下卷は西横堀の段、新口村の段に分れてゐる。龜屋におすはといふ忠兵衛の許嫁があるのに、分家の従兄の利平が戀慕して、忠兵衛が梅川に熱く

なつてゐるのを利用して中の島の八右衛門と共謀して忠兵衛を陥れて養家を追ひ、おすはも本家も共に我物としようとするを梅川の兄の忠兵衛が救ふといふ上卷の筋は、「三度笠」のおとら新七の關

係を一層技巧的にして一段作品の價値を低下させたものである。それにも拘らず飛脚屋の段と新口村の段とは舞臺上に何度となく繰返された。そして又此作が歌舞伎に入つて「戀飛脚大和往來」と改題されて興行される事となつた。寛政八年正月大阪の角座興行が始めで、今日に及んで居る。而して更にこの「大和往來」が操に逆輸入され、天保元年閏三月北堀江市の側の操芝居に於て「戀飛脚大和往來」の外題で新口村の段を竹本雛太夫と竹本氏太夫とが語り、其後操でも前の「けいせい戀飛脚」と並び行はれるに至つた。

最後に本曲が他の流派に及した影響を一瞥するに、一中節の語り物として今日に傳へられる「三度笠相合籠道行」と題する典雅哀婉なる樂曲の詞章は「冥途の飛脚」の「相合籠」を流用したもので、作曲者は都半仲である。而して半仲が後に獨立して宮古路豊後と稱へて豊後節の開祖となるに及んで更に之を轉用したものと見えて豊後の正本にも同じ詞章が残つて居るが、曲節は絶えた。同じく曲節の絶えたものに正傳節の「増補三度笠道行明日の噂」がある。寶曆十三年刊行の「春富士都錦」に載つてゐる。上記の道行文を多少改修したに過ぎない。又宮園節の正本に道行より二の口村迄を三段に仕立てたものが残つてゐる、大外題は「傾城三度笠」であるが、詞章は近松の原作を増補したに過ぎない。江戸の劇場で用ひられた梅忠の淨瑠璃としては次の諸曲がある。

寛政元年三月	市村座	艶容垣根雪	富本豊前太夫連中
寛政八年三月	河原崎座	燕鳥故郷軒	常磐津兼太夫連中

寛政十一年九月	森田座	三度笠戀の乗掛	富本延壽連中
文化九年六月	森田座	道行浮名の時附 <small>ときづけ</small>	常磐津兼太夫連中
天保八年九月	中村座	道行情の三度笠	常磐津文字太夫連中
天保十四年正月	中村座	道行故郷の春雨	清元延壽太夫連中
天保十四年九月	市村座	其名 <small>そのなのみ</small> 已浪花梅忠 <small>たにはのいへつと</small>	常磐津文字太夫連中
弘化二年九月	市村座	道行故郷の露霰 <small>つゆしぐれ</small>	清元延壽太夫連中

この外にもまだあるが、餘り煩瑣である上に此場合左程必要でもないから略して置く。
校訂用原本は七行五十四丁本。

吉野都女楠

正徳元年九月十日から竹本座の勾欄にかゝつたもの。

詩材を太平記から取つた作で、楠木正成の湊川戦死より楠木正行の旗擧げに及び、後醍醐天皇が吉野に皇居を定め給ふに至る頃迄の間の出来事を取扱つてゐる。正行が母と共に、坊門宰相邸から遁れさせられた後醍醐天皇を天神の森にお迎へして吉野に御案内申上げるといふ第四段の切によつて題名をつけたものと思はれるが、女楠の活動は僅かに此一段だけであつて、作としての主要なる

内容をなすものは足利尊氏の臣小山田前司一家の悲劇で、この前後に櫻井の遺訓、坊門宰相の暴戻なる振舞、名和長年の活動などが取合せられてゐるのである。

市 老翁初女楠
狂とめし本れもさる大程を老翁未
老翁とてふし本奥までてさうと春もあ
馬て本奥とてふゆ内もよふぬ一
と九又たれ像の境ゆれ本と重後わろ
鎌倉さうまふさそと亡びては足利治部
舟橋言氏柳お遊とてさるの東家い

本行七「楠女都野吉」

故に作の中心は第二段の切求塚身代りの段より第三段の東寺の首實檢の段、一條大路梟首の段、前司自刃の段迄である。而して求塚身代りの段は今日も歌舞伎で演じられる福地櫻痴居士の「求女塚身替新田」(明治廿五年三月歌舞伎座上場)の原作であると共に、首實檢の段は後の寺子屋の段に深い關係を有するのである。この一段は新田義貞の情義に

感じて求塚の戦場で義貞と名のつて大森彦七に討たれた小山田太郎高家の首を京都東寺の尊氏の本陣に於て、十八年前に武士の意地を以て勘當した父の小山田前司が實檢するのであるが、その様子

を寫した「近々と立寄り右へ廻り左へ向き、ためつすがめつ見れば見る程、疑もなき我が子の高家」といふ句は、寺子屋の段で松王が首桶を引寄せて「眼力光らず松王が、ためつすがめつ窺ひ見て」といふ名文句の粉本となつて居るのみでなく、「生顔いきがほと死顔しにがほは相好さうがうが變るなどと身代りの鬘首、それもたべぬ、古手な事して後悔すな」といふ松王のせりふは、本曲の「これ前司殿、生き顔と死に顔とは相好の變るもの」といふ大森彦七のせりふの焼直しである。

校訂用原本は七行九十丁本で、十一行三十三丁本を對校用とした。附けていふ、從來淨瑠璃の正本は八行本が行はれたが、此淨瑠璃を初めて大字七行本として刊行し、爾來丸本は七行本となり、これより以前の當り淨瑠璃をも七行本に再版するに至つた。

夕霧阿波鳴渡

寛文十二年に京都の島原から大阪の新町へ鞍替をして此廓で全盛をうたはれた名妓夕霧が萬人哀惜の裡に廿七歳を以て世を去つたのは延寶六年正月六日の事であつた。そこで大阪道頓堀の荒木與次兵衛座ではその翌二月三日から「夕霧名残なごりの正月」といふ外題で追善劇が興行された。伊左衛門に坂田藤十郎夕霧に霧浪千壽で、伊左衛門の傾城買の仕打が無上の大出來で、これが實に藤十郎の出世藝となり、又この芝居は年内に四度繰返し、それより一周忌・三年・七年・十三年・十七年忌

次いで夕霧の戯曲は貞享三年五月刊行の竹本義太夫の正本「三世相」さんぞうである。「夕霧三世相」きりぎりすさんぞう「遊君

三世相」及び「夕霧追善物語」共に異名同物であつて、これ亦近松の作である。夕霧の淨瑠璃として

あはせにきれたる月のをみはれよ

あはせにきれたる月のをみはれよ

古竹守者依ゆきし人恋を附せ

吾長自遊校合と再版を也

竹本義太夫

貞享三年五月言

馬三徳通寺町る命山州
大板を藤橋布とせ

山本丸義太夫

尾 卷 「相 世 三」

に夕霧が現世で多くの男を迷はせを罪によつて地獄の呵責を受けて居る様を見る事などがある。一方父左京も悪人の爲に一時家を奪はれて流浪したが、のち世に出で父子再會して春姫は官女に召さ

は最初のもので、夕霧の九回忌を當込んである。奈良の樂人狛左京が夕霧と契つて二人の間に春姫といふ子迄あつたが、夕霧死後春姫は左京の許で育てられた。然るに繼母の迫害を受けて父の不在の折に殺されようとするを老臣望月六郎左衛門に救はれて辛うじて虎口を脱し、大阪新町で夕霧の妹女郎に逢つて母の供養を營み、又その墓前で夢の裡

れ、夕霧は盛大な追善供養を受けて成佛するといふ筋であつて、時も場所も人も構はないお家騒動物式の夢幻的な佛臭い作柄である。同じ材題を同じ作者が扱ひながら一方歌舞伎の方では既に純世話物として脚色されてゐるに拘らず、かういふ風な淨瑠璃を作つたといふ事は頗る奇異に思はれるが、これは近松の筆も未だ若く、且義太夫の藝風と操に對するその頃の一般の好尚と又操本來の特質とに制約された結果による點が多かつた故と考へる。

然るに其後廿餘年を経過して義太夫の藝は圓熟の域に達し、近松亦歌舞伎の方面に於て青年時代から世話物について鍛へた腕を操の方面に於て振ふ事となり、先づ「會根崎心中」に大成功を收め、引續いて世話淨瑠璃を作つてその筆いよく潤熟巧妙の域に達した場合に作られたのが實にこの「夕霧阿波鳴渡」である。夕霧劇としては本曲は前を受けて後を開く大切な位置に立つ作である。上卷吉田屋が最も名高く、後の歌舞伎や淨瑠璃の夕霧物は皆こゝから出てゐる。

外題年鑑には本曲を以て寶永七年七月廿四日から「根元會我」の切として竹本座上場としてある。併しこれは疑はしい。何となれば若しさうだとすれば「鸚鵡が袖」にその外題が出て居なければならぬ筈である。此書は寶永七年の翌正徳元年秋刊行された竹本筑後掾の段物集で、筑後掾のこの時迄の語り物の外題の殆んど全部が網羅されて居り、寶永七年の諸作は勿論、正徳元年三月の「冥途の飛脚」迄も載つて居るのである。然るに「夕霧阿波鳴渡」だけは見當らずして、正徳二年九月刊行の筑後掾の段物集「鸚歌が蘭」に始めて出て居る。茲に於て本曲は正徳元年秋から同二年秋迄の

間の作であらうとの推測は當然起らざるを得ない。而してこの推測を合理的ならしむる有力な傍證ともいふべきは、本曲の大團圓にある「扇屋夕霧、憂ひ却つて悦びを、語り傳へて三十五年、又五十年五百年……」といふ句である。外題年鑑に従つて從來の人々の如く三十三年忌を當込んだ作と説明しようとしても、この句が邪魔になる上にそれらしい暗示すらも作中のどこにも見出せない。然るにこれを夕霧歿後の三十五年日を利かせたものとすれば何の不自然もない事になり、而してその三十五年日は實に正徳二年正月に當るではないか。して見れば前の推測はいよく動かない事となる。故に私は本曲を以て正徳元年末又は同二年初春の作と推定する。

改作物について一言添へて置く。寶曆元年四月豊竹座上場の「浪花文章夕霧塚」はその一である。浪岡橋平・淺田一鳥・安田蛙桂の合作。阿波の兒島侯の侍衣笠主計が、大阪新町の夕霧に溺れた爲に處刑されようとするのを、兒島侯へ出入の大阪の藥種商藤屋了哲に救はれてその養子となつて伊左衛門と名乗つたが、夕霧との關係はなほ持續するといふ風に仕組み、これに兒島家の重寶定家の色紙紛尖問題、伊左衛門の許嫁である平岡左近の娘おとせの貞烈な働などを取合せてあるが、改悪も甚しいといはざるを得ない。而してこの作を更に翻案したのが「傾城阿波の鳴門」(明和五年六月竹本座上場、近松半二等作)で、これには徳島の玉木家の寶刀國次の詮索をする十郎兵衛夫婦を助ける人物として藤屋伊左衛門は配せられて、原作の面影は全くない。それに對して安永九年に作られた「廓文章」は、同じ改作でも原作の面影を相當に傳へたもので、この後操芝居では度々繰返され

て居り、又歌舞伎に用ひられた事は言ふ迄もない。

最後に豊後節系統の夕霧吻について見るに、その原據は宮古路豊後の正本「夕霧阿波鳴渡」である。

夕霧阿波鳴渡



夕霧阿波鳴渡の正本「夕霧阿波鳴渡」の文をそのまゝ取り、夕霧伊左衛門の口説のあとに夕霧の身請を簡単に附加して一段物に纏めたものである。富本節の「春夜障子梅」(天明四年正月森田座上場)から清元の夕霧となつた同名の語り物は此系統を引いた詞章である。これに對して常磐津の夕霧といはれる「其扇屋浮名戀風」(寛政二年六月市村座上場)は義太夫

本正後豐路古宮「霧」

これは近松原作の吉田屋の段の文をそのまゝ取り、夕霧伊左衛門の口説のあとに夕霧の身請を簡単に附加して一段物に纏めたものである。富本節の「春夜障子梅」(天明四年正月森田座上場)から清元の夕霧となつた同名の語り物は此系統を引いた詞章である。これに對して常磐津の夕霧といはれる「其扇屋浮名戀風」(寛政二年六月市村座上場)は義太夫

の「廓々章」の系統を引いたものである。

六行三十六丁本を校訂川原本とし、八・九行三十丁本を對校用とした。

媼こもち

山やま

姥うば

正徳二年七月十五日から竹本座上場。時に作者六十歳。

坂田忠時の女糸萩が佐與中山の宿に於て旅宿の料理人となつて世を渡つて居る碓氷荒童丸といふ勇士の助太刀によつて、父の仇として年頃狙つた平正盛の臣物部平太を討ち、相携へて此處に宿泊中の源頼光に投じ、荒童丸は召抱へられて貞光と名のり、糸萩は敵の首を討つた重代の刀を捧げ、頼光はこれを鬚切膝丸と名づけて源家の寶刀とした。糸萩の兄時行は遊女荻野屋の八重桐に溺れて功名を妹に奪はれたのを愧ぢて自殺した。處がその魂魄が八重桐の胎内に入つて懐妊する。八重桐は山中に隠れて山姥となつて生み落した子を怪童丸と呼んで育て上げる。一方に於て頼光は正盛の讒言によつて一時京都を落ち、美濃で冠者丸の身代りによつて危難を遁れ、信濃の山中で季武と主従の約を結び、それより山姥に逢つて懷舊談を聞き怪童丸を召抱へ、江州甲掛山に分け入りて妖怪を退治し歸洛して恩賞を受けるといふ筋である。

第二段の荻野屋八重桐は當代の名優荻野八重桐の舞臺姿を人形劇によつて復現しようとしたものであるといはれ、またその長ぜりふは、「しやべり山姥」と稱へられて今尙本曲が舞臺に生命を有する場面の中心的興味を構成するものであるが、劇の系統上から見れば元祿十二年の近松の作「傾城

佛の原」の梅房文藏(坂田藤十郎の役)の戀物語、及びこれを轉用した「天鼓」(元祿十四年、近松作)の異版くればの中將身の上話などの二番煎じである。また第三段の冠者丸身代りの場は謡曲「仲光」の系統を引いた「忠臣身替物語」(元祿二年、近松作)によつたものであり、第四段は謡曲「山姥」を原據とする事は言ふ迄もなくして、題名も亦こゝに基くのである。

校訂用原本は七行八十四丁本で、十行三十五丁本を参照した。

長町女腹切

この淨瑠璃は大阪の長町に女の切腹といふ珍しい事件があつたのに、お花半七の情死を取合せて脚色したものであると言はれる。

處でお花半七の情死の實説については、關根只誠の「戲場年表」はこれを元祿十二年八月七日の事であるとし、お花は歌舞伎井筒屋かめの抱へで半七は道修町の刀屋であつた、そして心中の際男は咽を突いたが其場では死に切れずして三日目に死し、女は腹を切つた後咽を突立て即死したとある。併しこれについては他に傍證が無いから何とも言ひ兼ねるが、お花は本曲の筋にあるやうに寧ろ京石垣町井筒屋の遊女であつたといふ方が事實で、「戲場年表」の説の方が、逆に淨瑠璃によつて潤色されて居るやうにも感じられる。

次に此淨瑠璃の著作興行年月については安永八年板の「外題年鑑」には元祿十三年正月六日とあり、自然近松の世話淨瑠璃の嚆矢であると言はれて來た。併しこれは誤りである。其理由を簡単にいへば、第一に此淨瑠璃の中卷に「賣買高い此節二貫目ぢかい甘兩」といふ句があつて、これは金貨廿兩替には銀貨二貫目近くを要するといふ意味であるが、元祿十三年頃は金一兩は銀六十匁替であつて當らない、然るに正徳元年四寶字銀といふ粗惡な銀貨が行はれるに至つて銀八十匁を以て金一兩替と迄銀貨は下落したのであるから、此作は乃ち正徳元年以後でなくてはならぬ事となる。而して更に有力なる第二の證とすべき手がかりは中卷の

仲居のまんが供して通るあれは澤村長十郎。あつたら男をやがて大阪へ下り舟。歌流金子も難波津へ。咲くや此の花其の花の。噂も戀の種ぞかし。

とある點で、歌流は袖崎歌流、金子は金子吉左衛門のことで、長十郎と共にこの三人が程なく京から大阪へ下るといふ意味をこめてある。澤村長十郎は元祿十四年に京夷屋座初舞臺の役者であるから、元祿十三年に出る筈がなく、この點から見ても外題年鑑は誤つてゐる事となるが、さて前の銀貨問題と關聯して、正徳年間に於ける件の三人の移動を見るに、長十郎は正徳二年の顔見世興行（十一月廿七日）から大阪の光山座に、また歌流と金子とは同じく此年の顔見世から大阪の嵐三十郎座に出勤して居る。（役者懷世帶）而して作中に秋の季節に關する敘事のある點を併せ考へて正徳二年秋の作と推定してよからうと思ふ。

此淨瑠璃は上卷京堀川の刀屋石見内の場、中卷石垣町井筒屋の場、西石垣茶屋の場、道行、下卷大阪長町甚五郎内の場に分れて居て、刀屋石見の手代半七が深く契つた井筒屋のお花の急場を救ふ必用な金の才覺に窮して、大阪長町の伯母からさる大名の若殿へ上る爲だといつて細工を頼まれた信國の刀の中身をすりかへて、その賣りへぎの金を融通したが、とても遁れぬ身の上と覺悟し相携へて驅落し、事情を叔母に告白して死なうとしたが、伯母が代つて自害するといふので、信國の刀にまつはる因縁に牽かれて半七の伯母は孤兒の甥を助ける爲に犠牲となるといふのである。氣の通つた慈悲深い人で、しかも雄々しい武家の血を引いた處のある半七の叔母の性格が最も鮮かに力強く描き出されてゐる。中卷井筒屋の場で半七がお花の繼父九兵衛に向つて二十兩の金を投げつける條は「冥途の飛脚」の封印切の場に似通つてゐる。

享保十六年正月十三日から大阪の角座で興行した「たつもんかたなのめいげつ雙紋刀銘月」は此作を改作して二番續の歌舞伎に仕立てたもので、お花に藤井花松、半七に佐渡島長五郎で、その心中道行を宮古路豊後が出語りにして大當りを取つた。その詞章は現存するが、本曲の道行を改修したもので、骨は同一である。又豊後の正本として傳はる「まきうらよたへむすめかたき雙紋刀銘月」の中卷は此作の中卷井筒屋の場と同じである。明和元年五月竹本座上場の「まきうらよたへむすめかたき京羽二重娘氣質」(近松半二・竹本三郎兵衛作)も本曲の改作である事は改めたいふ迄もあるまい。

八行三十七丁本によつて校訂した。

茂兵衛大經師昔曆

有名のおさん茂兵衛の姦通事件を脚色したもので「外題年鑑」(明和板)には寶永三年九月二十一日から竹本座興行となつてゐるが、此作の大團圓が「當年未の初曆めでたく、開き始めける」といふ句で結ばれてゐるのは、正徳五末年春の作たる事を暗示するもので、天和三年に處刑された二人の三十三回忌を當込んだ作と見るべきである。

おさん茂兵衛の實説については、水谷不倒氏の近松傑作全集卷之四大經師昔曆の解題の中に次のやうに見えてゐる。

大經師の家は京都烏丸通り四條下る所にあり、主人は意俊(以春は憚りて字を變へたるもの)といふ、女房さんといふ者同家の手代茂兵衛と密通し、これが媒介をなしたる下女の玉と共に丹波國氷上郡山田村に潜伏し、おたるを召捕となり、天和三年八月九日詮議の末、さん玉の兩人は町預け、茂兵衛は手鎖にて三人とも更に茂兵衛の兄七兵衛へお預けとなり、翌十日さんと茂兵衛とは牢舎、玉は意俊にお預けとなり、同年九月廿二日三人共洛中引廻しの上栗田口に刑せられぬ。さて處刑の次第は、本犯なるさん及び密夫茂兵衛は磔、肝煎したる玉は獄門にかゝり、茂兵衛には兄弟三人ありしが、中宿をしたる者共と追放せられ、意俊は大經師の家斷絶してここに一件落着したりといふ。右は京都所司代にて密通者處罰の判例に供したる書留の大要(「趣味」第四卷第三號の春蘿生の寄書に據る)なりといへば、事實として信ずべきものなり。

とある。貞享三年刊行の西鶴の「好色五人女」の卷三段に見る曆屋物語の結末にも「……粟田口の露草とはなりぬ。九月二十二日の曙のゆめさら／＼最期いやしからず、世語りとはなりぬ。」とあつて、その年は天和三年らしく作中に暗示されて居る。又寶永元年刊行の「落葉集」卷五踊音頭の部に載つて居る小豆庄兵衛作の「おさん茂兵衛」も貞享元年初秋の孟蘭盆におさん茂兵衛及び玉の新精靈が精靈棚の前に還つて來る事になつて居るから、處刑を天和三年として居るわけである。然るに近松は「すでに貞享元年甲子の十一月朔日、來る丑の初曆けふより廣むる古例に任せ」と書き出して、作中の事件を實説や前の諸作よりは三年繰下げて貞享新曆頒布の際に始まるといふ風に仕組んである。近松が三十年以前に同じく貞享新曆頒布を當込んだ作を「賢女手習新曆」と題したのに對して、今この作を「大經師昔曆」と題したのは、一種の好對照をなして居るかに思はれる。

此作は西鶴の五人女に據る處は多いが、女主人公たるおさんの性格には頗る相違がある。即ち茂右衛門と姦通後五百兩の金を用意して駈落し大津の濱で入水したと書置を残して人目をくらまして不義の快楽に耽るといふやうなふて／＼しい、又徹底した處のおさんは、近松の作にはこれを見る事は出来なくて、おさんの姦通は、夫以春に生恥をかゝせて懲らしてやらうとの一念から出た事が、全く思ひがけない暗闇の人遣へであつたので微塵濁らぬ心であつたといふのである。兩作者の相違を比較する上にはこの兩作はよい實例である。またおさんの親道順夫婦やお玉の伯父赤松梅龍なども近松好みの人物として描き出されて働いてゐる。

下巻「おさん茂兵衛こよみ歌」の中のサイモン（祭文）の節付以下の曆づくしは「大經師おさん歌祭文」の茂兵衛が玉を仲立として以春の江戸下りの留守におさんに送る戀文の曆づくしの文に似た點が多い、この祭文はその結末の「京でおさんと好色の、五人女の一の筆、世の口ずさみ一昔、かかるあはれは又も世に來るまじ……」との句によつて處刑後約十年、即ち元祿五六年頃作られたものかと考へられるが、すれば此祭文も近松の作に幾分の影響を及したと言へる。又同じ「こよみ歌」の中の「強きおきめに粟田口、オンド蹴上げの水に名を流すおさん茂兵衛が新精靈……」の句は前に言つた踊音頭の「おさん茂兵衛」から取つたものである。故に參考迄に本曲に關係のあるその前半を左に掲げて置く。

おさん茂兵衛

小豆庄兵衛作

比は貞享元年まだ初秋の孟蘭盆に、なき人かへる魂祭たままつり。精靈祭の棚經たなまやうの、聲にひかれてお客人、我もくくと來る中に、はたち許りの若男わかをび、女精靈召具して、うたふ小唄の細々と、戀には開がましぢやと諷ひつれ、下女ひどり只一人召連れて、精靈棚まの一間なる、手島産てしまごにぞ直らるゝ。亭主由を見るよりも、これは見馴れぬお客人、お名は如何にと尋ねれば、問うてたもつ一嬉しやな、尋ねてたもつて恥しや。強きうき目に粟田口、蹴上げの水に名を流すおさん茂兵衛が新精靈、恥しながら來りたり。今一人の下女の名は、魂たまは冥途へ通へども、魂魄たまごここに止りて、文ふみの使ややりくりを、したる科にて是もまた、同じおきめに逢ひしぞや。亭主由を聞くよりも、

II. Die Funktion der Sprache

Die Sprache ist ein Mittel zur Kommunikation. Sie ermöglicht es, Gedanken und Empfindungen auszudrücken und mit anderen zu teilen. Die Sprache ist ein soziales Phänomen, das nur in der Interaktion mit anderen existieren kann. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, unsere Welt zu verstehen und zu gestalten. Die Sprache ist ein zentraler Bestandteil der menschlichen Kultur und des Lebens. Sie ist ein Spiegelbild der Gesellschaft, in der sie gesprochen wird. Die Sprache ist ein dynamisches System, das sich ständig weiterentwickelt und verändert. Sie ist ein Produkt der menschlichen Kreativität und des kulturellen Erbes. Die Sprache ist ein Mittel zur Selbstverwirklichung und zur Entfaltung der menschlichen Persönlichkeit. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, unsere Identität zu finden und zu festigen. Die Sprache ist ein Mittel zur Kritik und zum Wandel. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, die Welt zu verbessern und zu gestalten. Die Sprache ist ein Mittel zur Liebe und zum Frieden. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, uns zu verbinden und zu vereinen. Die Sprache ist ein Mittel zur Wahrheit und zur Gerechtigkeit. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, die Welt zu verstehen und zu verändern. Die Sprache ist ein Mittel zur Hoffnung und zum Glauben. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, die Welt zu meistern und zu überwinden. Die Sprache ist ein Mittel zur Freiheit und zur Unabhängigkeit. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, unsere Zukunft zu gestalten und zu sichern. Die Sprache ist ein Mittel zur Würde und zum Respekt. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, unsere Rechte zu verteidigen und unsere Pflichten zu erfüllen. Die Sprache ist ein Mittel zur Gerechtigkeit und zum Recht. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, die Welt zu ordnen und zu regieren. Die Sprache ist ein Mittel zur Harmonie und zum Wohlstand. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, unsere Lebensqualität zu verbessern und unsere Zukunft zu sichern. Die Sprache ist ein Mittel zur Glückseligkeit und zum Frieden. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, unsere Welt zu verstehen und zu gestalten. Die Sprache ist ein Mittel zur Liebe und zum Frieden. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, uns zu verbinden und zu vereinen. Die Sprache ist ein Mittel zur Wahrheit und zur Gerechtigkeit. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, die Welt zu verstehen und zu verändern. Die Sprache ist ein Mittel zur Hoffnung und zum Glauben. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, die Welt zu meistern und zu überwinden. Die Sprache ist ein Mittel zur Freiheit und zur Unabhängigkeit. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, unsere Zukunft zu gestalten und zu sichern. Die Sprache ist ein Mittel zur Würde und zum Respekt. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, unsere Rechte zu verteidigen und unsere Pflichten zu erfüllen. Die Sprache ist ein Mittel zur Gerechtigkeit und zum Recht. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, die Welt zu ordnen und zu regieren. Die Sprache ist ein Mittel zur Harmonie und zum Wohlstand. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, unsere Lebensqualität zu verbessern und unsere Zukunft zu sichern. Die Sprache ist ein Mittel zur Glückseligkeit und zum Frieden. Sie ist ein Werkzeug, das uns hilft, unsere Welt zu verstehen und zu gestalten.

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

扱は左様でましますか、さこそ冥途で中よくも、夫婦一處に添はれうの、但し氣儘に添はれぬか、愚かの人の問ひ事や、二世とかねたる中なれば、夫婦一處に所帯する住所こそ悲しけれ。賽の河原を西へ行き、地獄のずしといふ處に、無間の釜で茶を沸かし、血の池の水つるべあげて、猛火盛んにもやし立て、往來ゆきまの亡者にお茶まゐれ、お茶をまゐれと袖を引く。(下略)

又正徳五年正月大阪の嵐三十郎座で、おさんに嵐三郎四郎、おさん父嵐三十郎、助七大島道右衛門、以春山村義右衛門、母霞波たきえ、茂兵衛坂東彦三郎といふ役割で「大經師」の狂言が興行されて居るが、近松の作との關係は明かでない。

此淨瑠璃の上卷大經師内の段は、近世に至つて操では度々繰返されてゐて私の知る處でも天保から慶應迄に於て大阪の文樂座其他で十回以上も興行された。

元文五年十一月作者近松の十七回忌追善として此作を竹本座で「百日會我」の切として興行した時に「戀八卦柱曆」と改題して出した。尤もこの改題された稱呼のまゝでも後に度々繰返して上場され「昔曆」と併び行はれた。此他に「貞享元年情昔曆」といふ改題のものもあるが、此外題は餘り世に行はれなかつた。

七行四十五丁本によつて校訂し、八・九行廿六丁本を参照した。

嘉平次たけひら生いく玉たま心しん中ちゆう
おさが

正徳五年八月一日から「持統天皇歌軍法」の切として興行されたもので、時に作者六十三歳。

大阪松屋町九之助橋の茶碗商一つ屋五兵衛の悴嘉平次は許嫁のおきはを嫌ひ、伏見坂町柏屋の抱へおさがと深く契つた。嘉平次は金策に窮した結果却つて悪友長作の詐偽にかゝつて進退に窮し、死を覺悟してさがと牒し合せ、五月節句の夜大和橋の自分の支店で落合つた。こゝへ父五兵衛が尋ね來て強意見の上、情の金を置いて歸ると入違ひに長作が來て暴力を以てその金を奪ひ去る。いよいよ絶望の極に達した嘉平次は、さがと相携へて生玉社内に於て心中するといふ筋である。

上卷天満社内清水屋の場は「曾根崎心中」上卷の生玉社頭に似た仕組であつて、彼の徳兵衛に對するこれの嘉平次、彼の九平次に對するこれの長作は共に並行した相對的人物であるのみならず、惡漢長作については作者自身も「嵐の芝居の曾根崎の狂言が、面白うて再々見るとぬかしたかような見覺えた。取りも直さず油屋の九平次、惣じて狂言淨瑠璃はよしあし人の鑑になる、おのれはかたりの手本にするか師匠の九平次より倍越した大かたり」と嘉平次に罵らせて居るのでも知れるやうに、全く九平次型の敵役である。次に中卷大和橋の嘉平次出見世の場で、五兵衛が嘉平次におきはとの結婚を無理に承諾させてその固めの盃にとて嘉平次の差出す萩焼の大皿へ、腰に下げた瓢から酒を注ぐぞと傾けてからく／＼と酒にはあらぬ一步銀を山とあけて「慈悲知らぬ親の酒を見よ、誠の慈悲の味ひを飲みて知れや……この酒飲んで方々の恥辱をすゝぎ、無明の酒の醉させ」と言つて泣く條は「心中二枚繪草紙」の中卷で市郎右衛門が荒神へ供へた神酒徳利から酒と思

つて登歩銀をつぐ趣向からの脱化であるが、場面の活躍は前者の比でない上に、慈父の眞情が溢れてゐて、親の慈親を描くに特に勝れた筆を持つてゐた近松の作中でも稀に見る緊張した場面で、實に本曲の頂點を示すものといふべきである。

二人の情死に關する實説は明かでないが、本曲にあるやうに五月節句の事であつたと傳へられてゐる。

校訂用原本は七行四十七丁本。

父は唐土
母は日本
國性爺合戦

正徳五年十一月一日(淨瑠璃譜の頭註には十五日からとある)から竹本座に上場されたもので、空前の大當りをとり三年越十七箇月興行を續けた。のみならず此の作は時の劇壇に非常な刺激を與へ、歌舞伎の方面に於ても翌享保元年秋には京都の都萬太夫座、享保二年三月には大阪の嵐大三郎座と荻野八重桐座、享保二年五月には江戸の中村座市村座共にこの「國性爺合戦」を演じて一層人氣を湧かせたといふ有様であつた。又操の方では紀海音はこれをもぢつて「傾城國性爺」を作り、近松自身も引續いて「國性爺後日合戦」(享保二年二月)を出したがこれは當らず、更に間を置いて享保七年正月「唐船嘲今國性爺」を作つたがこれも失敗に終つた。然るに「國性爺合戦」だけは人氣があつ

享保五年正月、享保十六年五月、寛延三年七月といふ風に二度目三度目四度目と相當な年月を隔てては上場され、慶應末年迄に大阪の操芝居だけで私の知る範圍のみでも約三十回繰返され、かくして今尙舞臺に生命を有する名作である。

明朝亡命の臣鄭芝龍と肥前平戸の田川氏との間に生れた一子鄭成功が父に従つて支那に渡り明朝恢復のために活動し我國へも援兵を求めたが成らずして、のち臺灣に據つて長く清朝に對抗した著名な事件を材題としたもので、その荒筋は次のやうである。明朝思宗皇帝の時右將軍李踏天が韃靼王に内通して其軍勢を引入れて王城を陥れ帝を弑した。大司馬將軍吳三桂は亂軍中に我が兒を犠牲にして幼太子を助け、之を奉じて九仙山に隠れた。皇妹梅檀皇女は辛じて敵手を遁れて日本の平戸に漂着し舊臣鄭芝龍老一官の子和藤内に救はれた。老一官は帝を諫めたが川ひられなかつたので亡命して日本に渡り日本人を妻として和藤内を生み、既に廿餘年を過したのであつた。然るに今祖國の難を聞くや妻子と共に本國に渡り、前妻の女錦祥女の夫甘輝の居城獅子が城に赴き援助を求めた。甘輝は容易に肯じなかつたが錦祥女と和藤内の母との貞烈なる死に動かされて和藤内と同盟を結び、韃靼軍を撃破して李踏天を屠り、九仙山なる太子を迎へて明朝を再興し、和藤内は功を以て國性爺延平王に封ぜられるといふに終る。

此作の主人公を和藤内と呼んだのは、和(日本)でも唐(支那)でも無いといふ洒落からで、これが「父は唐土母は日本」と外題に角をつけたわけであらう。「國性爺」の「性」を性せうとよむのについて

は、穗積以貫は作者が支那めかさんが爲に南京などの例に倣つた遣り方であるが、若し正しく唐音に従ふならば國性爺と呼ぶべきである（難波土産）と言つて居るし、水谷不倒氏は「上方訛り殊に女詞にはせいの音をせんとはねて讀む癖は他にもあり、例へば傾城の假名をけいせいといはずけいせんとはねて讀む類なり。この訛りを利用し支那音めかしたる例の作者の頓才なるべし」（近松傑作全集卷三）といつてゐる。併し本居宣長の「玉かつま」卷九つねに異なる字音のことばの條に

もろこしの國の、明の代の明を、ミンと呼ぶも、唐音なり。今の代の清を、シンといふは唐音の訛なり、清の字の唐音は、ツインと呼べり。又明の代のとぢめに鄭成功といひし人を、國性爺と稱ふ。この姓の字をセンといふも、唐音にスインといふを訛れるなり。さてこの國性爺といふ稱は、國姓とは當時の王の姓をいひて、此人明の姓を賜はれるよしなり、爺は某老某丈などいふ老丈のたぐひにて、たふとめる稱なり。

とある。鄭成功は永曆帝から明帝の姓朱氏を賜つて國性爺と稱へられたのであるから「國性爺合戦」の「性」は當然「姓」であるべきだが、京都の菊屋板十行本の正本以外の諸正本や操芝居の番附は皆「性」の字を用ひてあるから、本集も亦慣用に從つて敢て改めずに置いた次第である。

本曲の眼目は三段目獅子が城の場であるが、その重要人物たる和藤内の母の義烈な死は事實によつたものである。齋藤拙堂の「海外異傳」や朝川善庵の「鄭將軍成功傳碑」にも芝龍の妻田川氏が節に死して一子成功を激勵した事を叙してある。この事實を劇化したのであるが、その手法は「基

「整太平記」山科閑居の場の切に似て、しかも彼よりは一層悲壯であり、一段と場面が活躍して居る。この段を長崎の譯司周文二右衛門が漢譯して支那へ送つたのも有名な話である。



野 仙 國

この作が大當りを取つたのは、材題が斬新にして時人の耳目を聳動するに足る事件であつた事、當時としては極めて珍しかつた支那を舞臺として彼土の生活人情等を俗受けのするやうに描き出した事、支那人と比較して日本人の特質を描きお國自慢に氣焔をあげた事、主人公國性爺が潤達にして一本氣で義に勇み武勇に勝れしかも祖國を忘れぬといふ日本人好みの陽性の人物であつた事、場面の變化に富み剛柔善惡の人物の配合宜しきを得た事等の色々の條件を擧げ得るであらうが、要するに詩材結構文章共に近松の作中屈指の雄篇である。この作によつて筑後掾殺後の竹本座の危機を救ひ



手 柄 日 記

同座の基礎を固め得たのは、國姓爺の成功を生でいつたやうなもので頗る興味深い現象であつた。

此作より前に國姓爺を材題とした淨瑠璃として作られたものに「國仙對手柄日記」といふのがある。錦文流の作で、山本飛驒掾座に於ける信濃掾・岡本今文彌の正本である。著作年代は明かでないが正本の終りに「山本彌三五郎受領手づま太夫山本飛驒掾太夫今文彌正本」とあるのによつて見れば、彌三五郎が飛驒掾を受領後間もない頃のものであると考へるが、彼の受領は口宣案によれば元祿十三年十一月廿五日である點から推すと、此作は同年末か翌十四年春は圍みを脱して日本に渡り智勇兼備の士を語らひ父王を助けようとして御影の沖に船がかりし高樓

頃の作と考へてよいと思ふ。雲南の龍明王が韃靼王の爲にその居城を圍まれたので、皇女梅だら女

に遠目鏡をすゑて往來の武士を目利し、こゝに鷲尾遠矢之助氏照同矢柄之助輝景の兄弟を得る。兄は色事師、弟は大力無双の勇士である。二人は彼地に渡つて奇計と武略とを以て韃靼軍を敗つて龍明王を救ひ、その功で兄の遠矢之助は太子となり、弟の矢柄之助は國姓爺となつたが、本國からの迎があつたので別れを告げて歸國し、兄弟が多年父の敵として狙つてゐた大友彈正を討果すといふ筋である。水がらくりなどを盛んに用ひた荒唐無稽のものであるが、近松の「國性爺」より先にかういふ作のあつた事は注目すべきであり、殊に彼の梅だら女と此の梅檀皇女とは頗る類似して居るし、又これの第五段の吳三桂の山蜂を入れた竹筒の計略は既に彼の「手柄日記」に用ひられて居るなど、兩者の間に多少の關係はあつたとも見られるので、今日迄餘り世間に知られて居ない作である故茲に一言して置く次第である。

校訂用原本は七行九十丁本で、七行百三丁本と十行五十四丁本とを對校用とした。

鑓やりの權けん三重さん帷かた子びら

享保二年八月廿二日から竹本座上場。時に作者六十五歳。有名な近松三義通曲中の最も勝れた作であるのみでなく、彼の作中傑作の一に數ふべきもの。

雲州松江侯の茶道の師淺香市之進の江戸詰の留守中、表小姓笹野權三は若殿御祝言の振舞の際眞

の臺子の茶の湯を勤め度い希望で、市之進の留守宅なる妻のおさゐにその傳授を懇願する。おさゐは權三を愛するの餘り長女との婚約を條件として之を許すこととし、夜中數寄屋に會合する。この時おさゐの性來の妬情勃發による狂態の爲に庭へ投出した二人の帶を、おさゐに戀慕して忍込んで居た川面伴之丞に握られる。權三が切腹しようとするをおさゐは「間男といふ不義者に成り極めて市之進に討たれて男の一分立てて進げて下され」と無理に「權三が女房、お前は夫」といつて相携へて駈落し、三十七の女と廿五の男とは相許し合つて諸方を流浪する。歸國した市之進は直に舅岩木忠太兵衛の宅を訪うて別盃を交し、義弟甚平と共に妻敵討に出かけ、遂に伏見京橋の上で二人を討果すといふ筋である。

上卷の切數寄屋の段が最も名高いのであるが、下卷の口忠太兵衛玄關先の段も勝れた場面で、義理と人情との纏綿の極致が描き出されてゐて、讀者や觀客を泣かせずにはおかない。

此作の實説については「月堂見聞集」の享保二年の條に次のやうにある。

一、七月十七日夜五つ時分、大阪高麗橋にて妻敵討有之、雙方雲州松平出羽守御家中

妻 敵 近習中小姓
池 田 文 次 年廿四

女 正井宗味妻
と よ 年廿六

實夫 茶道役 正井宗味 年四十
八歳

とよ親

小林幸左衛門

幸左衛門子

同 彌市郎 年廿四
歳

宗味子三人

姉

くめ 年十三
歳

弟

鐵太郎 年十一
歳

妹

よそ 年八歳

右は文次とよ兩人、六月八日に國許を駈落仕候而、同二十三日に大阪へ着、宗味は六月二十七日に江戸發足、七月十三日に大阪御奉行所へ相斷、同十七日討之、小林彌市郎儀兩人之非道を怒り、宗味をすゝめて大阪へ同道仕、文次旅宿を尋出し、兩人をそびき欺き、方人顔して宗味等ねらふ由を申、今夜の中に大阪をひらき、京都へもかくれ可申敷と諫む、兩人實と心得、高麗橋迄出る處を宗味待かけ討之、文次が衣類は越後ちよみの帷子染紋あり、紫縮緬の帶、疵は大小十二ヶ所、とよ衣類は、絹ちよみ帷子黒繪萩の模様、上帯黒縹子、下帯白縮緬、疵一ヶ所けさ切り、

宗味は足に一ヶ所疵有り、是は文次が止めを刺し候時に下よりなぐり候疵の由、彌市儀は兼て助太刀不_レ叶故に、兩人相果候を見て、直に國許へ歸り候。鐵太郎は朋輩の玉井紹知預置、姉妹は祖父小林幸左衛門預り(下略)

大阪では歌舞伎でも操でもこの事件を一夜漬にして興行しようとした事は、同じく此事件を綴つた浮世草紙の「女敵高麗茶碗」の次の序文で明かである。

難波の芝居に八つの櫓先をあらそひ、盆替りの間もなく、場所の働き目を驚かし、實にや好色橋辨慶とは、近松門左が思ひつき、浮世は夢の浮橋と、吾妻三八が趣向の外題なり。是ぞ因果はまはり燈籠の、嵐になびき吹き傳へたる女敵討、名高き橋の咄しをそのまま、取りつくるはずたて掛けて、高麗茶碗と此書をいふのみ。

時に 享保貳つのとし七月廿一日

吾妻三八は此時片岡仁左衛門と新地櫻橋北の芝居の相座本であつたから、此座で演じたものと見えて、一夜に作つた妻敵討の狂言が大出来であつたと「役者三幅對」(享保三年正月刊)に出てゐるが、近松の「好色橋辨慶」の方は外題は掲げたが都合によつて實演に至らずして一旦之を撤回し、改めて此事件の主人公を俗謡で知られた槍の權三に假託して趣向を立てて事件後一ヶ月餘にして上場したものだと思ふ。同じ事件を取扱つた浮世草紙に前にあげた「女敵高麗茶碗」の外に「雲州松江の鱧」(享保二年作、作者未詳)及びこの影響を受けたと思はれる享保三年の序文のある「亂脛三本鋪」(西澤



雲州松江の鱧より

一風作等あれど、近松の作は是等の影響を受けたとは思はれずして、上記の事實を基礎としつゝ事實に捉はれずして、例の虚實皮膜の態度で立派な作品を作り上げたのである。

而して此作の男主人公として用ひられた鐘三の権三は古く俗謡で知られた人名である。寶永元年刊行の「落葉集」卷之五祇園町跡の「哥の中に

鐘權三 男をどり 大阪にあり

ニ上リ そりやくそりやく、やりの権三
 ははすはにござる、谷のやつとんと、さ
 やでやああ、そろへにかゝる、しなへてか
 かる、どうでも権三はぬれ者だ、油壺から
 出すやうな男、しつとんとろりと見とれる
 男、磯の千鳥を追つかけて、石突つかんでづ
 んづとのばしやるく、さあさゑいさつさ



「附 番 操」

さつさ、あいさつさ、さつさどうでも権三はよつどつこいよい男え。

とある。斯く誂はれた鐘の権三は昔の鐘踊をよくした美男の若衆俳優であつたのを（或は俳優より権三郎の略よりの権三からやりの権三と訛つたのかとの説もあるがどうであらう）近松は槍の名手といふ風にしたのではなからうか。

又「重帷子」とつけたのは太平記の師直艶書事件で世に知られて居る「さなきだに重きが上の小夜衣わがつまならぬつまな重ねそ」の古歌の心を取り、討たれた時間夫は越後ちどみの帷子、女は絹ちどみの帷子を着てゐたのを利かせたものであると考へる。

延享四年二月十三日から豊竹座で興行された「裾つま重かさね紅梅服こうばいふく」は浅田一鳥・但見彌四郎の合作で、此淨瑠璃の改作であるが、結構文章共に遙かに原作に劣る。

校訂用原本は七行四十九丁本、對校用十行廿五丁本。

山崎與次兵衛壽の門松

享保三年正月二日から竹本座上場。時に作者六十六歳。

零落した難波屋與平が新町で全盛をうたはれる藤屋吾妻の意氣と、その情夫山崎與次兵衛の勇氣とに感奮して、金儲けの爲に江戸へ出立の際、廓の外で與次兵衛の戀敵葉屋彦助に傷を負はせて去る。與次兵衛は男の面目上冤罪を身に引受けて父淨閑の許に監禁の身となる。吾妻は廓を脱走して尋ねて來る。與次兵衛の妻お菊と父淨閑との情によつて二人は駈落する。與次兵衛は嘗てなき心勞と父との妻との眞情に精神的大刺激を受け九爲に發狂し、吾妻はこれを介抱しつゝさまよふ。江戸に下つた與平が大金を儲けて歸り、吾妻を身請して與次兵衛に添はせ、與次兵衛も恢復するといふ筋。

此作の上巻は吾妻が與平母子の乞を容れて與平に逢つて情をかけてやる場面が中心であるが、ここに吾妻の理想的の名妓たる容姿と言動と人柄とを描いて、これによつて與平を感奮興起させ、また與平と與次兵衛との應待の間に男と男との意氣の投合を示してゐるが、この二つの條件が第二段の葛藤の因となると共にまた大團圓の解決の動機ともなつてゐるのであつて、それが爲に近松の他の

世話物に類を見ない義侠的精神に富んだ作柄となつて居り、自然任侠的な與平といふ人物が頗る重要な一人物として働いてゐる。この點が後に「昔米萬石通」(享保十年正月、西澤一風・田中千柳作)を経て「雙蝶々曲輪日記」(寛延二年七月、竹田出雲・三好松洛・並木千柳作)と改作されて男達物と展開する要素となつたのである。併し本曲の眼目は中巻淨閑内の段である事は言ふ迄もない。將某の段は趣向としては「源義經將某經」(寶永三年近松作)の第四段軍法將某經の二番煎じで「碁盤太平記」の碁盤の條の類型であるが、場面の緊張して行くさまが隙間なく描かれて、後段の升落の段との二場を通じて、近松好みの濛い底光りのする慈父の典型たる淨閑の面目が遺憾なく浮び出ている。町人として世間への體面も大切であり、若い者の將來も考へてやらねばならぬとは十分承知してゐながらも、抑へ難きは子を思ふ親心である、まさかの時には子の身代りにならうとさへ思ふその本然的の慈愛の發露が新口村の孫右衛門より是一段と積極的である有難い親である。

さて此作の主人公ともいふべき山崎與次兵衛は槍の權三や丹波與作や薩摩源五兵衛などと同じく俗諺で名高い人物で「落葉集」卷四古來當流踊歌百番中の第一番に

本調子 吾妻うけ出す山崎與次兵衛、請出すく山崎與次兵衛、今は思ひの下紐とけて、廓住ひのうさつらさをば、聞くもなかくうらめしやく、聞くもなかくうらめしやく、しょうがのく、これくこれくしましよかの、そつこで請出せ三百兩、二口合せて六百兩、すつとしよてんびん、はり口ちんからり。

と出て居る。斯く元祿期に踊歌に迄謡はれた山崎與次兵衛については次のやうな巷説がある。山崎與次兵衛といふのは攝州河邊郡山本村の豪家坂上與次右衛門の替名である。彼は大坂新町の富士屋與三兵衛の抱への名妓吾妻に打込み、九軒町の井筒屋太郎左衛門方で揚詰にして贅を盡して遂に身請をした。それを歌に作つて謡つたのが、あづま請出せ山崎與次兵衛、うけだせ〜山崎與次兵衛、そつこでうけ出せ三百兩といふ唄で、其頃の女郎の身の代金三百兩は珍しい事で、今の千金より幅が利いたといふ。

以上は「澤標」の要旨であるが、西澤一鳳は異説を立てて居る、彼のいふ處では山崎與次兵衛は實在の人物ではなくて、大坂新町の吾妻に溺れた淀屋辰五郎をモデルとしたのである。辰五郎は北濱の家屋敷が闕所となり大阪を追放されて八幡へ引籠つたのであるが、八幡といへば直に山崎が連想されるので、こゝに山崎與次兵衛といふ名を假設し又父を淨閑と呼んだのは、山崎から思ひついて連歌師の山崎宗鑑をもちつてつけたのである。その上宗鑑の職人歌合の油賣の歌に「宵ごとに出て出づる油賣ふけてのみ見る山崎の月」に因んで難與平を油賣としたのである。而して難與平が吾妻を見そめるといふ趣向の原據は京都智恵小路上立賣の富豪の子息灰屋紹益の妾となつた六條の廓柳町林屋の吉野といふ名妓に懸想して彼女の一夜の情に深く感じ、且つ我身のはかなさを歎いて桂川に身を投げて死んだといふ京七條通りの鍛冶河金彌の弟子仁藏の話と河村瑞軒が材木の取引で巨利を占めた事柄とを取合せたものであるといふ。(傳奇作書續中、後集中) 巧妙な説明であるが淀屋

辰五郎の傳説に附會し過ぎたやうな感じもする、辰五郎が吾妻を二千兩で身請して妾としたのを「其頃大阪にての風聞専らにて、吾妻請出せ山崎與次兵衛、歌に作りて狂言の仕組に淀屋が替名をば山崎與次兵衛と出したり。」とある「元正間記」によつたやうに思はれる點もあるが、それにしては前の「そつこで請出せ三百兩」の歌の大切な句が生きないやうにも思はれて、「滯標」の方にも捨てがたい點もあり、結局正體は不明になる。但し作の系統から見れば「椀久末松山」の「案」であり、椀久・辰五郎・與次兵衛は同型の人物であつて、こゝに色々の憶説も生れる餘地がある。

七行四十三丁本によつて校訂した。

日本振袖始

享保三年二月廿二日から竹本座上場。

近松の作中神代の材料を取扱つたのは此作のみである。素盞鳴尊瓊々杵尊の妃木花開耶姫を戀慕して鰥香背の臣の言に従ひ暴力を以て之を手に入れようとされる。稀代の悪女岩長姫と化して現れた出雲の籬の川上鳥上の嶺の八岐の大蛇といふ悪鬼がその隙に乗じて十握の寶劍を奪ひ去る。尊はその贖罪の爲に先づ嵯山もがりやまに棲む疫神の首領三熊野大人みくまのうぢ以下の四百四病の疫神を平定して無病息災の手形を得、更に天兒屋根の臣の諫言を用ひて單身出雲に到りて稻田姉を救ひ、八岐大蛇を退治して

寶劍を奪還し給ふといふ筋で、第四段目に尊が稻田嫌の執病を平癒させるために兩袖の下を切開いて鬲腋の脇明けとする、これ日本に於ける振袖の始であるといふ條がある、顧名の因つて出づる所である。



「始袖振本日」

第三段の蘇民將來巨且將來の事は「備後風土記」などに見えて居て古い民間傳説であるが、妻盞鳴尊を祭つた祇園牛頭天王とは最も深い關係があつて、世に知られて居る信仰であるからこゝに用ひたので、本曲中最も人情味の出て居る場である。

此作は本年（享保三



狂言本より

年) 京都の榊山四郎太
 郎座で、原作と同じ筋
 で演じられた。役割の
 おもなるものは天津兒
 屋根の臣柴崎林左衛門
 岩長姫霧波瀧江、咲耶
 姫富永玉桐、三熊野大
 人澤村音右衛門、巨旦
 將來坂東又十郎、蘇民
 將來坂東彦三郎、稻田
 姫淺尾みやこ、素盞鳴
 尊榊山小四郎。そして
 淨瑠璃を都太夫一中・

都若太夫・都三中、三絃を千原新六が勤めて居るのは珍しい、多分道行を語つたものであらう。

此淨瑠璃が文化三年七月大阪御靈の操にかゝつた時には近松梅枝軒・佐川藤太の手によつて増補された。

校訂用原本は七行八十三丁本。

會^そ我^が會^{くわい}稽^{けい}山^{ざん}

享保三年七月十五日竹本座初日。

會我兄弟の復讐を材題とした所謂會我物の戯曲は謡曲淨瑠璃歌舞伎を通じて見れば非常に多數に上り、恐らくは同一材題に基づく戯曲の數の多い點に於ては他に類例を見ない程であらう。自然近松の作中にもその數は決して少くはない。本曲は言ふまでもなくその最も著名なものゝ一であるが、この外にも左の諸曲がある。

世繼 會我

天和三年刊

會我七以呂波(義經追善女舞)

元祿九年刊

團扇 會我(百日會我)

元祿初年刊

根元 會我

元祿初年カ

會我五人兄弟

元祿十四年刊

大磯虎稚物語

元祿十五年刊

本領 會我

寶永三年刊

加増 曾我

寶永三年刊カ

曾我 扇八景

寶永三年刊

曾我 虎磨

寶永七年刊

是等の諸曲はいづれも「曾我會稽山」よりは前に出たものであつて、しかもいづれも直接間接多少の影響を本曲に及して居るのであるから、自然本曲は近松の曾我物としては集大成されたものであると共に又渾融潤熟の妙境に達したものと云ふ事が出来るかと思ふ。古來本曲を近松時代物の三大傑作の一であるなどとさへ稱へられたのも、あながち過當の評でもないと思はれる程の手際の作柄である。

此作の第一の特長は曾我兄弟の復讐前後の、廣い場所に亘つての複雑な出來事を建久四年五月二十八日寅の一點より同二十九日卯の上刻迄晝夜十二時の間に縮寫して新躍の趣致を全曲の上になぎらせた點にある。第二には曾我兄弟以外の人物、殊に蒲冠者範頼巴御前朝比奈二の宮夫妻禪師坊等の活動が目ざましく描き出されて、これが兄弟の復讐といふ事件の佳點を鮮かに浮出させるために渦を巻いて居る事である。

福地櫻痴居士の「十二時會稽曾我」(明治廿六年五月歌舞伎座上場)は本曲の改作である。

七行九十三丁本によつて校訂した。

傾城酒呑童子

享保三年十月二十五日から竹本座興行。

此淨瑠璃は本年九月三日落着の大阪新町茨木屋幸齋の處罰事件を頼光四天王時代の世界とし、大江山酒呑童子退治に附會して脚色したものである。茨木屋幸齋の一件については「浪花青樓志」「過眼録」などにも見えて居るが、左に神澤其蛸の「翁草」卷四所載のものを引用して参考に供する。

浪華新町傾城屋茨木屋幸齋事身の程知らぬ奢を極め、己が居間は金襖水晶の障子輝きわたり、宛も宮殿の如く、朝夕掛盤にて饗膳の式に等しく、日々に献立を以て料理を伺ひ、庖丁人山海の珍味を整へて之を饗す。あまた抱への傾城打掛姿にて配膳給仕す。己が心に叶はざる料理をば足を以て膳蹴返し、身には錦繡を衣とし、ラツコの敷皮梨子地の曲象、その過差高位の人にも超え、其頃八文字屋自笑が出せし草紙にも、傾城寵昭君と題せし五冊ものに、其驕りを書けり。我家の裏に公儀地の有りしに、それへ能舞臺を建て、常に猿樂を翫ぶ。かやうの類重ねく超過して、享保三年に廳所へ召呼ばるゝ處に虚病を構へて出でず、仍りてまづ手錠をかけ、所へ御預けになり、幸齋家内を改めらるゝ處に、金銀財寶の高は未だ考へず、傾城の抱へ太夫三十七人、引舟三

十七人、禿三十七人、天神四十二人、禿四十二人其外局女郎など大勢これあり、凡そ家内の人數五百人許りなり。同九月三日幸齋並に悴多助牢舎仰付けられ、御詮議の上大阪三郷御拂ひに相成り、而して幸齋は京都島原に来て娘の名前にて暫く潜居しけるが、大阪にての奢りの事喧しく人口に在りて、京にても粗く御沙汰あるくらゐなれば、島原にも住みがたく、跡を匿して去りぬ。

(下略)

序にいふが、此作の太四郎といふ人物は即ち前の實説の悴の多助をモデルとしたのである。多助は父とは異つて性質温厚にして風流の嗜もあり、且つ世才にも長けてゐたので、島原の揚屋町の者が取持つて桔梗屋といふ絶家の株を買ひ、次第に繁昌するやうになつたといふ。

そこで近松は此事件を當込んだ淨瑠璃として本曲を作るにあたつて、新に筋を立てたのではなくて十一年前の自分の舊作「酒吞童子枕言葉」(寶永四年九月)を改作して間に合せたのである。「酒吞

童子枕言葉」は五段より成る時代物であるが、其筋はさつとかうである。花山天皇の寵妃弘微殿の女御がかくれ給うたので、平安盛は女御と容姿の酷似してゐる中納言高房の女三の君を入内させて君寵を擅にしようとする。併し三の君は渡邊綱の媒酌で鳥飼少將と婚約が定つてゐるから、綱と保昌とは少將に納れようとする途中で、姫は大江山の酒吞童子にさらはれる。(以上第一段) 山科の花山寺へ隠遁遊ばした花山院は三の君と瓜二つといふ高房の養女右近を召される事となつたが、弘微殿の怨念が祟をなすのが第二段。第三段は加藤兵衛の訴へにより、頼光は兵衛の女横笛を誘拐した

北白河の廣文に嚴命を下して江州鏡山のひはだの長の許に賣られて居る横笛を救はせる。兵衛廣文等が尋ねて行つて見れば、折しも横笛は勤めを厭つて自害を企てて重態である。で、廣文も申譯に切腹し、その女を兵衛に横笛の身代りとして養女に遣す、これが第三段。第四段は頼光四天王酒呑童子退治のため大江山入、童子物語。第五段童子退治。

これに對して本曲は第一段は全然同文、第二段も正本によつては同文、第三段は改作であり、第四段第五段のみが新たに作られた部分で、こゝに前に擧げたやうな事實をほゞそのまま用ひて茨木屋幸齋の放恣驕奢な生活を描いてゐるが、それでも横笛・加藤兵衛・廣文などの人物は同一の名稱であるのみならず、境遇關係も同一である。さればかう比較して見れば「酒呑童子枕言葉」に於て全體の筋の上から見て不自然の挿入の如くに思はれる第三段鏡山ひはだの長内の段は或は茨木屋の驕慢を暗示して世の注意を促したものではなかつたらうかとさへ思はれる程であつて、兩篇の關係は頗る興味あるものと思ふ。

外題は、新町の通語で吉田屋を兼好、茨木屋を童子と呼んだのでそれを利かせた上に「酒呑童子枕言葉」を改作して世界を酒呑童子退治の頼光時代に取つたのでかくつけたものである。

七行八十七丁本によつて校訂したが、これは流布本とは稍異なるにより、流布本の本書と相違する部分、乃ち初段の三の宮をさらはれる條及び二段目の口をイ本として併せ掲げて置いた。思ふに八十七丁本が原形で、こゝにイ本として掲げた流布本は後に補修されたものであらう。

博多小女郎浪枕

享保三年十一月二十日より竹本座興行。

京都の商人小町屋惣七が商用のため筑前へ下る途中、門司の沖で海賊船に乗合せ、彼等のために海中に投込まれたが、不思議にも九死に一生を得て博多に行き、柳町の奥田屋で年来馴染の遊女小女郎に逢ふ。こゝで圖らずも前の海賊連と再會して、あはや血の雨を降らさうとしたが、その張本毛剃九右衛門は首領たるの襟度と機智とを以て咄嗟に小女郎を身請して惣七に與へて一味たらん事を求める。惣七は大苦悶の末、國禁の罪を小女郎の戀に代へて毛剃の配下となり、不自由なく同棲したが、遂に召捕らるゝに及びて自殺するといふ筋。中巻の京都心清町惣七借宅の場で、惣七小女郎が壁を隔てて父惣右衛門と訣別する條は「冥途の飛脚」の新口村から脱化した趣向である。

今日でも舞臺に生命を有する「毛剃」の原作であつて、海賊を取扱つて居るといふ點に、近松の他の諸作に類例を見ない異彩を放つものであるが、その實説については從來不明であつた。私はこれについて先年雜誌「邦樂」第五卷四號(大正八年七月刊)に考證文を掲げて置いた。同誌は今では殆んど手に入れ難いやうであるから、こゝにその要點だけを摘出して置く。

濱松歌國の「攝陽落穂集」に「享保四年十一月、唐船密商者五人、高麗橋にて三ヶ月さらし、野

江に於て鼻をそぎ、其後銀錢等を遺され、御拂に相成候は、珍しき仕置なり」とあるのがその原由だらうと言つた人もあつたが、これは信じ難い。それよりは注目すべきは「月堂見聞集」卷の十享保三年の條下の次の記事である。

閏十月十九日(享保三年)朝六つ半時に、大阪御屋敷にて今度長崎表抜買の者に被_レ爲_三仰付_一候趣、北條安房守様御屋敷にて、抜買の科人御召出し、其町々年寄五人組家主共被_レ爲_三召出_一、安房守様飛驒守様御立會にて被_レ爲_三仰渡_一候、扱又殿様御入被_レ遊候て後、御役人方より本人町人共へ御申渡し有之由、罪人總高六十四人、内御預け三十人許

京東石垣二條行當り田中屋半兵衛事

辰砂源兵衛

同油小路通二條上る町

福島屋仁左衛門

右兩人は閏十月十九日朝、牢屋敷にて死罪に被_レ仰付候。

長崎者 さつまや嘉平次

肥前者 石垣八右衛門

肥前者 米屋平兵衛

大阪者 小倉屋善右衛門

大阪者 難波屋仁左衛門

小倉者 若松屋市兵衛

小倉者 岩崎三介

右七人閏十月廿一日より三日の内、高麗橋にて鼻をそぎさらし、夫より御追放。

野村久左衛門 勘左衛門

右三人の者方々へ住居仕候拔買頭にて候へ共、其同類訴人いたし、御公儀様より御穿議の多そくに相成申候故御褒美として家財の内四ヶ一被召上、残り本人へ被下候而御赦免、何方に住居仕候共御構無之候。

傾城 かつ山 年三十一歳計

右は野村久左衛門、小西又兵衛兩人かけ持の女房に被成居候、尤拔荷少々づつ自分に賣買仕候、これも御構無之御赦免。

京大宮通七條よしご名を替

傾城 江口 年二十歳計

右は大阪者久左衛門と申者妻にて御座候、男走り行方知れ不申候、是も御構ひなく御赦免。

油小路二條上る町まつご名を替

傾城 名は不知

右は油小路二條上る町福島屋仁左衛門妻、諸色道具被下御赦免。

三條西欄東

きく 年四十歳計

是も御構無之御赦免。

大阪 平野 櫻井和尙

右は傾城かつ山伯父にて御座候、久左衛門をかまくまひ置候、御尋の始不存由いつはり申候、其科に依て御預け置被遊候、是も御召出し出家之役に候へば久左衛門命たすけ度一筋御開扇被遊、無構御赦免。(下略)

拔買防止に關してはこれ以前から其筋では頗る心を盡して居たのであつたが、享保三年閏十月に及んで一網打盡的にこの拔買仲間を處罰したのが件の記録となつて表れたものである。その中で特にこゝで注意すべきは閏十月二十一日から三日間高麗橋で鼻をそいでさらした上追放された嘉平次以下の七人で、これが近松の作の毛剃一味のモデルとなつた徒輩であると思ふ。近松はこの珍しいさらし者があつたのでこれを種にして趣向を立て、一ヶ月後の十一月廿五日から「博多小女郎浪枕」と題して竹木座に上場したと解釋してよいやうである。近松が作中に使つた海賊の名を上記の者どもの名と比較して見るに、

長崎者さつみや嘉平次……………長崎者彌平次

肥前者米屋平兵衛……………徳島の平左衛門

大阪者小倉屋善右衛門……………上方おぐら屋傳右

大阪者難波屋仁左衛門……………なにはや仁左

小倉者若松屋市兵衛……………市五郎

小倉者岩崎三介……………三藏

かういふ風に當嵌められるかと思ふ。それでは肝腎の毛剃九右衛門はといふに、これは肥前者石垣八右衛門の「八」を「九」にかへて、そして拔買頭であつた野村久左衛門を利かせたものであらう。(八右衛門は俗に「けぞり」と渾名されたともいふ)のみならず作中の一文字屋の江口丸屋の勝山など

いふ名も、野村久左衛門小西又兵衛兩人かけ持の女房といふ傾城かつ山、大阪者久左衛門妻傾城江口とあるをその儘利用したのである。また作の結尾に「重ねて悪事を止まの、顔に焼鐵入ればくろ、耳そぐ鼻そぐちみどろちんがい追拂ふ」とあるのは「高麗橋にて鼻をそぎさらし夫より御追放」とある事實によつて作者一流に書き流したものであり、傾城どもに向つては「汝等は流れの身、彼奴等に添ふは勤の慣ひ科にあらず、行先とても構ひなし」と仰渡しになつたのも「御構無^レ之御赦免」と申渡された事實によつたものと思ふ。

此淨瑠璃の改作としては寛政元年五月九日から北堀江座に上場された「博多織戀^{はかたねりこのおもひ}錯^{ごち}」(菅專助・中村魚眼)が世に知られてゐる。その他歌舞伎の方にもいろいろ改作翻案もあるが今はそれには及ばない。

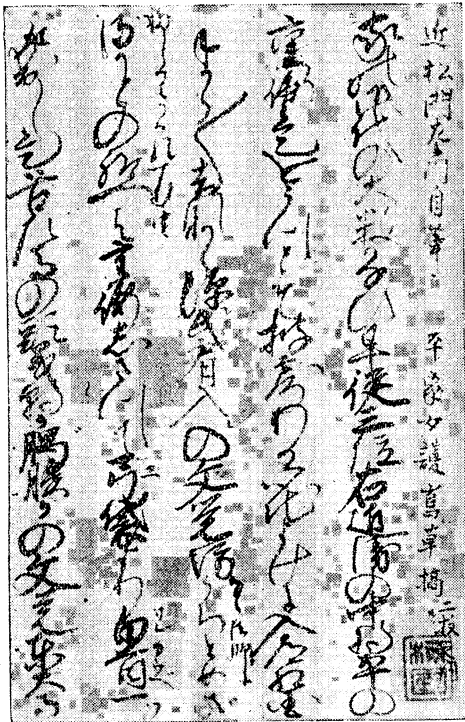
校訂用原本は七行四十丁本。

平^{へい}家^け女^め護^ご島^{しま}

享保四年八月十二日より竹本座上場。時に作者六十七歳。

平重衡が南都焼討から都に凱旋した事に筆を起し、清盛の横暴を緩和しようとして重盛が苦心する事、清盛は後白河法皇に對し奉つて不臣の振舞の多かつた天罰と、俊寛の妻あづまや少將成經の

情人千鳥を虐殺した祟とによつて熱病にかゝつて悶死する事、鬼界が島の流人の生活、その赦免されて歸る折の状況、牛若丸が女装して母常磐御前の館に忍び込み、心を合せて色じかけで源氏一味の徒を糾合しようとする事、宗清とその女松が枝との情によつて常磐母子は虎口を遁れる事等を叙し、文覺が源氏の蜂起平氏滅亡の経路を夢見るといふに終る。



作者自筆「平家女護島」草稿

第二段鬼界が島の段は後には歌舞伎の舞臺にも上せられた名高い場面であるが、こゝは謡曲「俊寛」に依つた事は言ふ迄

もない。併し少將と千鳥との情事を設けて場面を色どり、且つ俊寛に對して平家物語や謡曲には見られない特殊の性格を與へてゐるのが注目すべき點であり、これがやがて「俊寛島物語」で名高い

「姫小松子日の遊」(寶曆七年二月作)の原據ともなつたのである。

次に第三段朱雀御所の段は清盛の妾となつた常磐が色に耽つて多數の男を引入れる有様を描いて

あるが、それは「朱雀の御所の邊を通れば貴賤に限らず、男たる者かいくれに行方なく、再び影も見事なし」といふ有様で、「朱雀の御所は女護の島」と言はれ、願名さへもこれに因んだ程であつて、全篇の山とも見られるが、こゝには有名な吉田御殿の巷説が取入れられて居るものと思ふ。

校訂用原本は七行八十四丁本。



紙表本正「話物鳥島郎四草天」

傾城島原蛙合戦

享保四年十一月六日竹本座初日。

藤原秀衡の四男高衡蝦蟇仙人の幻術に長じ、頼朝の討手を遁れて入洛し、七草四郎と稱し、部下の獅子木佐仲太と共に妖術と黄白とを以て森宗以大矢野松と右衛門等以下無學の土民を迷はして徒黨とし、更に智謀に富みたる浪士手塚幡樂を一味に加へようとしてその女更科が島原桔梗屋に遊女となつて居るのを身請して恩を賣り、その代償として父を説かせる。然るに更科は



七草四郎を父の仇と狙ふ葛西清治と相許した仲である。然るに葛西と七草とは手塚の浪宅にて圖らず出逢ひ、更科を囮として交々手塚に迫る。幡樂は義理と人情とにからまれ、二人の射合ふ矢先に貫かれ、更科を清治に託して死ぬ。四郎は一味と共に九州七草城に籠つて其勢が盛んであつたが、更科と清治の妹琵琶姫とは畠山重忠の助を得て城内に紛れ入り、清治と内外相呼

應して邪宗の徒黨を滅すといふ筋である。三段目の手塚浪宅の段で、更科が立歸つて戶外から兩視を呼ぶ場面は「合邦内の段」を聯想させられる趣向であり、幡樂が雙方から射合ふ矢の中へ飛込む條は最も緊張した技巧を示して居る。

天草四郎の島原の亂を材題とした事は言ふ迄もないが、此作の藍本となつたものは寛文六年八月



刊行の「天草四郎島原物語」であると思ふ。これは流派不明の古淨瑠璃の正本であるが、肥後の國天草の住人大矢野甚兵衛の一子天草四郎が切支丹宗徒を集めて天草城に據つてその勢猖獗を極めたが、寄手の板倉・細川・松倉・鍋島等の諸侯の軍が奮戦して遂に之を陥れるといふ顛末を六段に綴つたものである。近松はこの作を材として、七草四郎を奥州秀衡の四男高衡の後身に作り、それに禁裏御池の蛙合戦の事等を取合せて想を構へたものと思はれる。又作中の主要人物の一人である傾城更科の抱主を桔梗屋としたのも、彼の茨木屋幸齋の悴が島原で桔梗屋といふ廢家の株を買つて再興し、日に／＼繁昌したので、その桔梗屋を當込んだものであらうかと思ふ。

延享四年八月二十三日から竹本座で興行した「傾城枕軍談」(並木千柳・三好松洛・竹田出雲合作)は本曲の翻案で、世界を秀吉時代に取つて趣向をこらしたもので、外題の角書に「都變名島勘左衛門、故郷呼名七草四郎」とつけてある。

七行七十七丁本によつて校訂した。

井筒業平河内通

享保五年三月三日から竹本座上場。時に作者六十八歳。

伴大納言宗岡が惟喬親王に謀叛を勧め奉るに始まり、嘗て惟喬親王を位につけようとしたが失敗

して死んだ紀名虎の白骨が惟喬の招魂の祕法によつて再生し、御所を脅かし奉つたので、業平は紀有常と共に天皇及び二條后を奉じて難を避ける事、河内の高安家の老母の苦肉の計、生駒姫と井筒姫との戀争ひ、生駒姫の伯父大炊之介の奸惡、紀有常の妻二條后の御身代りに立つ事等幾多の波瀾を描き、遂に惟喬惟仁の位争ひを少年相撲の勝負によつて決定するといふ筋である。

これより先、業平の河内通を材題としたものに元祿初年の刊行と思はれる宇治加賀掾の正本「河内通」があつて、その中に井筒の怨靈と高安なる白露姫との業平に對する戀争ひを描いてある、この點は本曲の第四段「怨靈振分髮」に影響があると見れば見られるが、一篇の題材結構は寧ろ近松が青年時代に加賀掾のために作つて與へたと推定される「惟喬惟仁位争ひ」（これたかこれひとくらあつた）（天和元年以前の作）の後篇と見るべき作柄である。この「惟喬惟仁位争ひ」は文徳天皇の第一の皇子惟喬親王の外叔父たる紀名虎は、第二の皇子惟仁親王との位争ひのための右近の馬場の競馬に敗れたのがもとで憤死するといふのが主想であるが、本曲の發端に於て「名虎は大力弓馬の達人なりしかど、天の時至らず、競馬相撲の勝負にまけ終に無念の此の世を去る」とあつて、それから名虎の再生といふ段取りとなるのが、即ち兩作の關係を語るものである。因にいふ惟喬惟仁位争ひに競馬相撲を行はれた事は、「平家物語」卷八名虎相撲の條に見えて居るが、本曲に於てはこれを少年相撲にしたのが作者の技巧である。

校訂用原本は七行八十七丁本。

雙た生こ隅ま田た川かは

享保五年八月三日より竹本座上場。

吉田少將行房とその妾斑女との間に梅若松若といふ瓜二つの雙生兒があつて、梅若は早くから御臺の子として育てられてゐた。行房は、義兄常陸大掾百連が比良嶽の靈木を伐つた祟で、天狗に魅入られて自ら誤つて御臺を殺害した上に松若は天狗にさらはれ、その上自分も百連の奸計にかゝつて死し、吉田家は破滅する。梅若丸は流浪して東國に下り、人買猿鳥惣太の兇手にかゝつて天死する。惣太は吉田家の舊臣淡路七郎の成れの果てで、主家に辨償すべき一萬兩の金を得ようとして人買となつたのであつたが、故主の幼君を手にかけたと知るや、自害して腸を擱んで天に抛ち、天狗となつて松若を尋ね求めて吉田家を再興しようといつて悲壯な最期をとげる。一方に於て斑女は狂女となつて我子の梅若の行方を尋ねてさまよひ出で、山伏法界坊に導かれて隅田河畔に來り、淡路の七郎の妻唐糸の物語を聞き一本柳の下に我子を弔ふ。折しも淡路の七郎の化現の天狗が松若を携へ來て母なる斑女の手に戻し、これによつて吉田家は再興するといふ筋である。

謡曲「隅田川」を本とした作であつて、殊に第四段はその翻案である。又この作は後世の「法界坊」や「松若」の濫觴をなすものとして注目すべきである。

七行八十一丁本によつて校訂し、十一行三十二丁本を参照した。

心しん 中ちゆう 天てん の 網あみ 島じま

享保五年十二月六日から竹本座に上場された。天満お前町の紙屋治兵衛と曾根崎新地紀の國屋小春とが、享保五年十月十四日即ち十夜回向の時に、大阪郊外なる網島大長寺のほとりで情死した事柄を脚色したものである。

六間間口の紙屋の主人で従妹のおさんといふ貞實な女房を持ち勘太郎お末といふ六歳と四歳になる子供の父でありながら、三年來紀の國屋の小春に熱中して情死迄も覺悟した治兵衛は、小春との仲を抱主から堰かれてゐる。治兵衛の兄粉屋の孫右衛門は藏屋敷の侍に扮して小春に逢ひ、治兵衛の事を斷念せよとさとす。折から忍び來て窓越しに二人の對話を聞いて興奮の極狂態を演じる治兵衛に對しても意見を加へ縁を切らせて伴ひ去る。然るに約十日後、治兵衛の戀敵太兵衛が小春を身請するといふ噂を聞いて、小春の氣質と今の心境とを察知するおさんは衣類迄も質入して所要の金を調へて治兵衛の顔を立て小春の命を救はうとする。折悪しく舅五左衛門が來て此體を見るや嚇怒して強制的におさんを離別させて連れ歸る。治兵衛は遂に小春と共に網島大長寺の境内で情死するといふ筋である。變化に富む各場面の間には有機的統一が保たれ、その中に活動する主要人物の性格も



七月七日
座本
太夫
豊竹座
上場
され
た

双扇長柄松車



男律世
女律世
松車
長柄
双扇
豊竹座
上野
合作
黒藏主
豊竹
永輔
浅田
一鳥
難波
三藏
津
飲子

附番「松柄長扇雙」

よく描き別けられて、近松の作中有数の傑作であり、又心中悲劇の一典型といふべきである。

寶曆五年七月七日から豊竹座に上場された「双扇長柄松」(並木永輔・浅田一鳥・難波三藏・三津飲子・黒藏主・豊竹上野合作)はこの改作である

が、結構散漫文章拙悪にして原作の佛は少しもない。長柄の一つ松の枝に辭世を書いた一雙の扇を吊してその傍で益死するといふ結末によつて題名をつけたのである。同じく改悪の一例として挙げ度いのは明和六年七月廿八日から竹本座で興行された「中元噂掛鯛」で、作者に三好松洛・竹本嘉藏の二人である。上巻山崎の段、

中巻八百屋の段、道行夢路の千日参り、下巻醬油屋の段と分れて居るが、これ亦結構散漫の愚作である。是等に較べれば、同じ改作でも安永

七年四月廿一日から北の新地芝居で興行された

「心中紙屋治兵衛」(近松半二・竹田文吉作)の方が出来がよい。大體の骨は原作によつて居るが、當時の見物の氣に入るやうに、又舞臺の上を賑はすやうにと増補改修が施され、浮む瀬の段、新地茶屋の段(河庄の段)長町の段、紙屋内の段、道行、跡と分れて居る。寛政以後操芝居で「増補天網島」の外題で度々繰返されたものはこれであり、又歌舞伎で演じられる「紙治」「河庄」などと呼ばれるのもこれから出てゐる。

此作の成立については翁草に「享保五年の冬、近松翁住吉新在家の酒樓に遊びてありし時、俄に大阪より芝居者來り、ゆふべ、網島の大長寺に男女の情死あり、何卒速に大阪へ歸り、淨瑠璃に作りて給らば、あす一日の稽古にして明後日より興行せんとて、ひたすら頼みければ、早駕籠に乗りて大阪にかへり、駕籠より下りて其儘に筆をとり、かごにて走り歸りしまゝ書きつけしとて『走り書き』と書き出し、直に『謠の本は……』と書きつゞけ云々」とある。これについては西澤一鳳始め、好事家のこしらへ事との反對説もあるが、眞否は別として著名な挿話として添へておく。

七行四十三丁本によつて校訂し、十行廿四丁本を参照した。

津 國 女 夫 池

享保六年二月十七日より竹本座上場。時に作者六十九歳。

外題の角書つのがきに「後太平記四十八卷目」と掲げてあるのも作の世界と題材とは大凡推測出来るであらうが、足利義輝が酒色に溺れて三好長慶に弑せられたので、浅川藤孝は一旦出家した義昭入道

を強ひて還俗させて將軍とし、諸國の軍勢を召集して三好松永を滅すといふのが大筋になつてゐる。併しその中に藤孝の家臣冷泉造酒之進と義輝の室の侍女清瀧との戀物語を挿み、相通じた二人は義輝の室をかくまふ爲に兩親の許に行つた時始めて兄妹たる事を告げられ、慚愧懊惱の極死を決したが、造酒之進の養父冷泉文次兵衛が舊惡を懺悔して二人の死を救ひ、その妻と共に攝州福島の女夫池に身を沈める願末を第三段に描き、この一段を全篇の山とし、願名も亦こゝに因んだのである。

處でこの第三段目の道行の跡なる文次兵衛浪宅の段から切の女夫池の段迄は若き女の盲目的の熱烈な戀を描いた點に於て、又意外に意外の重なつて遂にめぐる因果の自然の成敗を示す點に於て、且又舊惡懺悔によつて最後の解決を示す點に於て近松の作中稀に見る因果的技巧的の場面であつて、後の文耕堂や並木宗輔などのやうな技巧派の巧んで描く場面の先驅をなすやうに思はれる。而して此中で清瀧が造酒之進とは兄妹と知れ、畜生道へ墮ちたかと歎き悲しみながらも、軒端に戯れ狂ふ牝牡の同じ毛色の猫を見て「あの猫も兄弟かア、羨し、兄弟夫婦と契りても、人も咎めずそしられぬ、猫になり度いゝこちや猫ぢや」といふ有名な條は、元祿元年近松三十六歳の時都萬太夫座の二の替り狂言(正月狂言)として書いて與へた「今源氏六十帖いんげんじ」の中にある、水木辰之助の扮した姫松がその戀人幾世之助が兄と知れても思ひ切れず猫になり度いと思ひ、遂にその一念で猫の所作

をするといふ有名な場面を轉用したものである。また文次兵衛が驚くべき舊悪を告白して酒之進に向つて汝の親の敵はこの文次兵衛であるといつて人々をあつと言はせる趣向は寶永四年京龜屋座



りよ「帖十六氏源今」

りにした操本位の場面であつて甚だ好評であつたので、寛保二年四月再興行の時は「室町千疊敷」と改題した。

の二の替りに興行された「けいせい石山寺」の狂言で浪人樋口勘助が高野より下向して女房に座敷の真中へ蒲團を敷かせ白装束に袈裟をかけ、朋輩忠右衛門を討つて其女房を呼び迎へた悪事を懺悔して、その脇差を兄息子三之助に渡して斬られようとする場から出たものであるといはれる。

第四段の「千疊敷其世語」は出語出遣で舞臺装置を大が

此作が竹本座で評判を取つたので、同年の盆興行に京都の都萬太夫座では作者佐渡島三郎左衛門が同じ外題で之を歌舞伎に仕立て、三好長慶宮崎義平太、松永彈正松本友十郎、淺川藤孝勝山助十郎、造酒之進染の井半四郎、清瀧霧浪おのへ、大淀山本かもん、文次兵衛澤村長十郎などの役割で興行し、また大阪の中座にも此年九月廿八日から上場された。

七行九十五丁本によつて校訂した。

女おんな殺ころし油あぶら地ち獄ごく

享保六年七月十五日竹本座初日。

大阪本天満町河内屋徳兵衛の次男與兵衛が、番頭上りの繼父徳兵衛の寛容なのにつけこんで次第に増長して放蕩無頼の不良漢となり遂に實母の勘當を受け、日限りの借金の返済に窘しめられて同町内同商賣の豊島屋の女房お吉に金の無心を言つたが斷られたので彼女を慘殺して一時巧に犯跡をくらましたが結局露顯して召取られる次第を脚色して次のやうに上中下三卷に仕立てたのである。上卷は野崎参りの場面で、與兵衛が馴染の遊女の事で會津の武士と大喧嘩をして散々な目にあひ、お吉の世話になる。こゝへ伯父の山本森右衛門を出して後の伏線としてある。中卷は河内屋の場で、與兵衛の兄太兵衛が訪ね來て徳兵衛と共々與兵衛の放埒をこぼし、與兵衛を勘當するやうにと強く

すゝめて去る。そのあとで外から歸つた與兵衛は金の事で徳兵衛と衝突して繼父を足蹴にして天秤棒で打擲する。折柄歸宅した實母おさはが之を見て與兵衛を勘當する。下巻は三場に分れ、第一場は五月四日夜の豊島屋の場。豊島屋七左衛門は掛金を集めて歸り、お吉のすゝめる酒を一抔ひつかけて又掛取りに出かける節季の急がしい店頭の様から徳兵衛とおさはとが相次いで尋ね來て與兵衛の事で義理の立て合ひから、結句おさはの眞情吐露となる、こゝには親の慈悲がよく描かれてゐる。二人が去ると與兵衛が入代つて金の無心から遂にお吉を慘殺する凄愴な場面(題名はこゝから出てゐる)第二場はお吉を殺して掛金を掠奪した與兵衛が、内心には恐怖を抱きながら色里で浮かれる模様。第三場は豊島屋内の場で、非業の死をとげたお吉の三十五日の逮夜の供養の席で、いよゝ天命のがれ難く證據が擧がつて與兵衛が召捕られるといふに終る。

かういふ風で筋は割合に簡單であるが、放逸無慚の與兵衛の性格が活躍し、また徳兵衛の篤實で主思ひの寛容な人柄や、お澤の子を思ふ慈愛の心情などがよく描き出されてゐて、近松の世話物中でも異彩を放つ屈指の傑作である。全體に寂しい緊縮した感じの多い上にお吉殺しの場が餘りに寫實的に物すごく血なまぐさいので、當時は受けなかつたやうであつた。で、その眞價が認められるに至つたのは近年の事のやうに思はれる。

實説は明かでないが、この作中に示されて居るやうに五月四日夜の殺人、三十五日逮夜頃犯人捕縛といふ経路の事件であつたらうと推察される。此作の下巻に「油屋の女房殺し、酒屋にしかへて

幸左衛門がするげな殺し手は文藏憎いげな」とあるので、歌舞伎にも仕組まれた事は推知される。これは本年七月七日から大阪中座で興行された「契情八棟造」の狂言で、幸左衛門は座本の竹島幸左衛門、文藏は佐川文藏をさすのであらう。残念な事には當時の繪入狂言本を見ないから筋を知る事が出来ない。

校訂用原本七行五十丁本、對
校本十行二十六丁本。

信州川中島合戦

享保六年八月三日竹本座初

日。

信州諏訪明神に參拜した武田
信玄の世子四郎勝頼と長尾景虎
の息女衛門の姫との情事を悪意
ありて村上義清が表沙汰とした
爲に甲越の兩雄は戦端を開く事



い せ い け

となり、村上は漁夫の利を占めようとして企てる。相携へて走つた勝頼衛門の姫の急を救はうとして野猪の爲に不具となつた山本勘助は、武田信玄の三顧の禮に感じて桔梗原の茅屋を出でてその軍師となる。景虎は重臣直江山城と山本勘助との姻戚關係を利用して勘助の老母を囮として勘助を招かうと苦肉の計をめぐらしたが、老母の剛骨なる振舞のためにその計畫は失敗した。

のち村上は勝頼と衛門姫とによ

つて殺され、川中島に對陣中の甲越兩雄も山本勘助の働きで和睦するといふに終る。第三段は「輝虎配膳」の原作であり、勘助の妻おかつの吃りの仕打は「傾城反魂香」の「吃又」の轉用である。

享保六、七年頃に京都の龜屋座で興行した「けいせい足曳山」は此作を歌舞風に仕立てたもので、



足 曳 「 曳 足 」 よ り

信玄に辰岡染右衛門、輝虎に三保木儀左衛門、衛門姫に尾上菊五郎、直江に山木彦五郎、妻からあや坂東豊三郎、勘助母榊山小四郎、玉とよ辰岡久菊、勘助榊山四郎太郎等の役割であつた。

校訂川原本は七行七十八丁本。

心しん中ちゆう宵よひ庚がう申しん

享保七年四月二十二日から竹本座上場。近松翁七十歳の時の作で世話淨瑠璃としては最後のものである。

お千代半兵衛が宵庚申の夜に生玉の大佛勸進所に於て夫婦心中をした事を脚色したもので、竹本座上場と同じ年月の四月六日から豊竹座で上演された紀海音の作「心中二つ腹帯」と同一材題によつたのである。

二人の心中は本年四月六日の朝だとの説もあるが、西澤一鳳は次のやうに言つてゐる。

お千代半兵衛の心中は享保丑年（六年）四月五日宵庚申の夜六日の朝の事なり。寅年（七年）四月六日より豊竹座紀海音作にて心中二腹帯を出す、同四月廿二日より竹本座近松門左衛門作にて宵庚申を出す、然れば同年同月に淨瑠璃出て十六日違ひ、竹豊兩座張合に出せしなり（下略）

とある。そして二人の心中の動機となつたお千代の姑去りについても、淨瑠璃の作意と實説とは頗

見るに、その出来ばえに於ては、近松の方が海音に勝つて居る事はいふ迄もない。それは上巻と中巻とを比較して見れば容易に知り得る事で、「二つ腹帯」の堅い潤ひのない作意が柔げられ、温められ、人情美化された點に於て、遙かに近松の作の方が味があるやうに思はれる。併し先鞭の功は海音にあるから、詳しい事は後の「淨瑠璃名作集」の中の「二つ腹帯」の解題の條下に於て述べる事とする。

校訂用原本は七行四十七丁本。

關 八 州 繫 馬

享保九年正月十五日から竹本座上場。近松は「心中宵庚申」を書いて後、松田和吉の「佛御前扇車」(享保七年九月)及び、竹田出雲・松田和吉合作の「大塔宮職鎧」(享保八年二月)を添削したのみで、新作の筆を執らなかつたが、七十二歳の老筆を呵して三年目で此淨瑠璃を作つた、處がこれが翁の絶筆となつたのである。

平將門の遺子將軍太郎良門は源氏を滅し、亡父の遺志を繼いで天下を覆さうとの大望を企て、妹小蝶を源頼光の室の侍女として住込ませ、笈の竹筒を通して互に内外の情況をしめし合せて頼光を討たうとした。然るに小蝶は頼光の弟頼信を戀慕してその戀敵たる詠歌の姫を除かうとして術策を

る相違するといふ事柄について、同じく一鳳は「傳奇作書」拾遺、上、の中にかう記して居る。

大阪新鞆町の八百屋半兵衛嫁お千代と心中情死したるを直に宵庚申として出せしは誰もよく知りたる事にはあれど、千幼少の時新鞆の老人の話に聞きしは、實説も淨瑠璃の如く、只違ひあるは、八百屋の姑婆は虫も殺さぬといふ程のよき人なり。伊右衛門といへる老人もあながち悪人ならねど、兎に角若い女好にて、下女雇女を孕ませる事度々にて、嫁お千代を口説く事甚しければ、姑に是を告げけれど、まさか男の半兵衛には此事もいひ兼ね年月を過す内、半兵衛は用事有つて遠方へ行き、長らくの留守中なれば、舅伊右衛門かゝる折にこそ本望を達せんとてか晝夜とも透間さへあれば嫁をくどく。老婆是を氣の毒に思ひ、常盤町の伯母の方へ預け、世間の人の問ふ時には、連合の悪性よりとはいはれず、よん所なく嫁の身持家風に合はぬ故預けしなど答へけり。半兵衛歸宅の上は仔細なく、お千代も呼戻せしが、伊右衛門ますく煩惱の犬の如く、人目をかまはず口説き聞入れざるを根に持ちて養子掣半兵衛すこし仕あやまちも仰山に罵りけるにぞ、老婆も種々と諫言しけれど、伊右衛門は猶逆立ち、物言ひの絶えぬ故、義理にせまつて、暇を出し、宵庚申の夜遂にはかなき情死をしたりとぞ。淨瑠璃に書く時には老婆を悪人にせぬ時は、憎み増さぬ故にや、門左衛門の作意より、善人却つて悪人といはるゝも老婆の不幸なるべし。

すれば、事實よりは淨瑠璃の方は人物の上に性格の相違があり、自然心中の動機も作者の構想によるものと見てよいと思ふが、興行上の時日に關しては、豊竹座が先づ一周忌を當込んで上場し大評判であつたので、竹本座もこれに倣つて、この「心中宵庚申」を出したものであらうと考へられる。併し十六日の立後れのために、興行上に於ては失敗に終つたと傳へられて居るが、兩作を比較して

弄し、頼光の弟出羽冠者頼平その犠牲となりて、餘儀なく良門の一味となるに至る。これが爲に頼平の乳兄弟箕田二郎の忠死となりて頼平兄と和解し、四天王等と共に葛城山に良門を攻滅し、小蝶にのり移つて源家に禍を及した土蜘蛛の悪靈を退治するといふ筋である。

近松の作中最長篇にして、結構の雄大なる變化の裡に統一を保てる等實に作者として老衰を知らなかつたと思はれる大劇詩人の最後の作品として恥かしからぬ雄篇大作である。

第四段の小蝶の怨念が土蜘蛛の妖精と化して頼信の室を惱ます條は謡曲「土蜘蛛」の翻案である。また第一段の御園の段で頼平が烏帽子の掛緒を切らせる條は楚の莊王の絶纓の故事から出てゐる。即ち説苑復恩篇に

楚莊王賜羣臣酒、日暮酒酣、燈燭滅、有下引美人之衣者上、美人援絶其冠纓、告王趣火來上視絶纓者、王曰、賜人酒、使醉失禮、奈何欲顯婦人之節、而辱士乎、乃命左右曰、今日與寡人飲、不絶冠纓者不灌、群臣百餘人皆絶去其冠纓、而上火、盡懼而罷、後晉與楚戰、有一臣常在前、五合五獲首、卻敵卒得勝人、莊王怪問、乃夜絶纓者、とあるのを翻案したのである。

七行八十九丁本によつて校訂し、十二行三十三丁本を對校用に供した。

